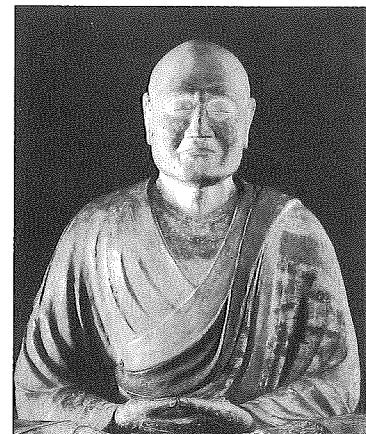


中世



香椎神社



鑑真 像
(唐招提寺)

に十一月二十日に漂着、二十六日には太宰府に着いて正月を過ごし、二月一日に難波、四日に奈良東大寺に到着したことが、『鑑真和上東征伝』（『鑑真過海大師東征伝』）に記されている。鑑真と関わりの深い人物として、吉備真備がいる。彼は藤原仲麻呂により天平勝宝二年（七五〇）太宰府の筑前守（国司）ついで肥前守に左遷され、佐賀の地に赴任している。翌年（七五二）十一月に再び遣唐使（入唐副使）として入唐し、帰国途上の天平勝宝五年十二月七日に屋久島に漂着、翌年一月に帰国し、二月に勅使として来日した鑑真を東大寺に安置した人物である。二人の日本への来着時期や入京の時期に共通性が多く、同じ遣唐使船団での渡海であった可能性も高い。鑑真の来日は鎮護国家をめざす天皇の悲願であり、靈亀二年（七一六）から十八年間遣唐使として唐にとどまつた経験があり遣唐使として再入唐した吉備真備の目的の一つに、この悲願達成があつたかもしれない。鑑真と真備との唐での親密な関係はたやすく推定されるし、来日になたつて鑑真が、真備のかつての赴任先であつた肥前・大宰府（筑前）へ到つたことは偶然ではないかも知れない。奈良の名僧鑑真が久保田町に上陸した可能性が存在することに、古代のロマンが感じられる。

概 説

古代ギリシアの歴史学者ヘロドトスは「エジプトはナイルの賜物である」と言った。ならば「久保田は嘉瀬川の賜物である」といえる。その嘉瀬川は本流の流路が徐々に西遷している。つまり流路が東南より南西へと移っている。現在の流路が本流となつたのは石井樋が築造された一七世紀前半以後である。

平氏は平清盛の父忠盛のころより西国に基盤をつくった。清盛の弟教盛には嘉瀬荘が与えられている。

嘉瀬津は古代より有明海に面した港として賑いをみせている。八世紀半ばに渡来した唐僧鑑真の上陸地とも伝承されている。また嘉瀬津は平氏と緊密な関係をもつていて、現嘉瀬町荻野の法勝寺には僧俊寛の墓も伝承されている。



嘉瀬川の流れ

できる。

平氏を滅亡させた源頼朝は、中原久経・天野遠景に後白河院の下文を持たせて九州に下向させた。下文の内容は公領・莊園の不法な横領を禁止するものであった。しかし、後白河院領の神崎莊での土豪武士による乱暴狼藉事件が続発したので、莊官が本家である後白河院へ不法行為を上申した。その訴えられた者の一人に窪田太郎高直がいる。後白河院は神崎莊の莊官に嚴重に処置するように命じている。窪田高直が御家人であるかどうかは史料的には明確にできない。ともかく一二世紀末には、久保田町域に有力な武士が成長している証左がある。当町快万に鎮座する旧郷社の香椎神社は、安元二年（一一七六）窪田因幡守藤原利常が筑前香椎宮より分霊して建立したと伝承されている。しかし、利常は実在の人物で、しかも窪田高直とは血縁関係にあると推測することも満更捨てた考證ではないのではないか。

窪田高直の後裔は、香椎宮を氏神として崇め郷土の開発に努めたと考えられる。現小城町大字岩蔵の雲海山岩蔵寺の「如法經過去帳」によれば、一五世紀前期に死去した窪田利弘や同祖利道円は、窪田高直の直系と考えて間違いないと思われる。また、窪田氏一族に千葉氏の通字である「胤」の字が用いられている者がいるが、これは窪田氏が小城を拠点とする千葉氏の傘下にあつたことを証明するものである。

窪田氏は一六世紀半ばには、龍造寺氏の配下として活動している。実は龍造寺氏と窪田氏は姻戚関係にある。窪田の母（慶閑尼）の妹が窪田民部少輔に嫁いでいる。

武雄の後藤氏を征庄した隆信は、天正五年（一五七七）三男家信を後藤貴明の養子として同家を相続させた。家信が武雄入りの際、家臣として連れていった隨身「武雄五十人土」の一人に窪田藏人盛利（太郎左衛門と改め

る）がいる。こうして鎌倉初期よりこの地域の有力な武士に成長していた窪田氏は、戦国期を逞しく生き抜き、武雄後藤家の家臣となり、武雄に移住したことがわかる。

鎌倉時代には有力農民が名主に成長していく者がいた。現久保田町域内で史料的に確認できる名（名田）としては、恒安名、得万（徳万）名、金丸名、快万名がある。名（名田）の耕作を請負った名主は、徐々に武士化していく。前述の窪田氏は平安末期に既に武士化した有力名主であったと推測される。

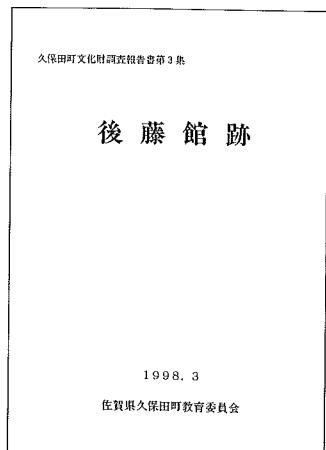
恒安名の名主が武士化して成長した恒安氏は、戦国期には窪田氏に匹敵するほどに成長し、隆信の三男家信の武雄入部に随行した「武雄五十人土」に恒安平六左衛門（のち岡部に改姓）の名がある。

古代末から中世にかけて当町域に關係する莊園としては「福所庄」があげられる。一〇世紀末の史料に登場しており、莊域は福所江の河川域であろう。また、佐嘉郡の蛎久莊の一部が当町域内に飛地として存在している。そうであれば、すぐ東に隣接する嘉瀬莊が当町内にあつたのか、もしくは飛地として存在したことも十分考えられることがある。

久保田町域に安富莊があつた。同莊は元来五六七町四反の面積だったが、一三世紀末には一四〇町八反となつていて。安富莊の存在は近世初頭の慶長十一年（一六〇六）龍造寺政家が寄進した香椎宮の三の鳥居の銘文や、寛永五年（一六二八）造立の彦隆山三所權現社の鳥居の銘文によつて確認できる。中世の地名呼称が近世まで続いていることを証明するものである。安富莊の莊域は、北部は現佐賀郡富士町より南部は久保田町域まで広がっている。おそらく嘉瀬川の上流から下流域に点散する莊園を総称する呼称であつたと推測される。ただし、現町内のどこの地域が同莊であつたかは断定できないが、香椎宮や三所權現が所在する快万から上恒安一帯が含まれ



嘉瀬川の河口と有明海の干潟



「後藤館跡」調査報告書

久保田町教育委員会による館跡発掘は平成2年から実施し、同3年7月完了、この結果をまとめた報告書が平成10年に刊行された。

るのは確実であろう。

中世における久保田町域は行政的には佐嘉郡の例が多い。しかし、戦国期には小城郡とも記載されており、どちらの郡に所属していたかは明瞭ではない。

中世の中期から後期にかけて、当町域に大きな政治勢力として影響を及ぼしたのは千葉氏である。千葉氏は源頼朝より源平争乱での恩賞として小城の晴気保の地頭職を与えられた。一三世紀後半の元寇に際して防備のために同地に下向し、

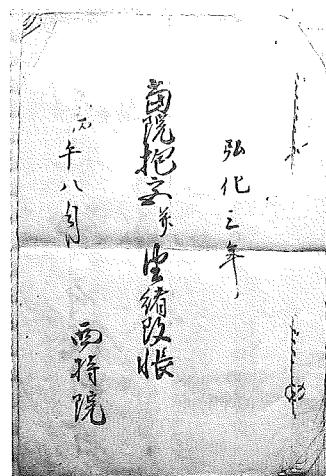
一四世紀初め千葉胤貞の時より小城に土着した。千葉氏は河上神社との結びつきを強め、元来の支配勢力である宇佐八幡宮や、一四世紀初め頃よりは宗像氏の勢力を驅逐して、肥前国の守護クラスの勢力をもつことになった。

南北朝時代は、一時懐良親王・菊池氏を中心とする九州南朝方が勢力をはつたが、九州探題に今川貞世(子俊)

が九州へ着任すると、北朝方が有利となつた。

大内氏に圧倒された少弐氏は、一五世紀半ばより肥前へ逃亡してきた。中小の在地土豪層より龍造寺氏が、少弐氏を立てて徐々に台頭していく。龍造寺氏は千葉氏の傘下でもあつた。しかし、千葉氏は内紛で自壊していく、龍造寺氏が大きく成長し、佐嘉・小城郡を征圧した。隆信の時代には少弐冬尚を破つて、九州を島津・大友氏とともに三分する一大勢力に成長した。

上恒安にある彦隆山安養寺西持院は、多数の山伏を組織し、相当な軍事力をもつ寺院であつた。元龜元年(一

当院抱宮并由緒改帳
(弘化3年) (『西持院文書』)